

論文要旨

本研究では、自閉スペクトラム症と診断されるクライアントを中心に置きながら、厳密にはそう診断されない、より軽度のクライアントも含めた、「自閉的なクライアント」への心理療法的アプローチについて検討された。

自閉スペクトラム症は、近年、その病因が遺伝的なものであると捉える立場が優勢になり、いわゆる心理療法的アプローチは、認知行動療法、応用行動分析等を除けば、主流ではなくなっている。しかしその一方で、自閉スペクトラム症を「自他の分離」の躓きとして捉えて、その観点から心理療法的アプローチを実践している臨床家や研究者もいる。そして、これらの立場の中で、「言葉のボール」の投げ合うことで、クライアントとセラピストの「心の主体（主観）と客体（対象）が分かたれ、より鮮明」になるとする、「キャッチボールモデル」がある。確かに、キャッチボールをするためには、両者の間にそのボールが行き来するための空間が必要であり、やり取りをする両者はその空間を隔てている必要がある。従って、キャッチボールができるということは、両者の間に空間があることであるし、あるいはボールをやり取りしようとする姿勢や態度によって、両者の間に空間ができていくということも考えられる。このことから本研究では、自閉的なクライアントの心理療法における「自他の分離」にかかわる、ボールのやり取りに着目した。

しかし、実際のボールのやり取りにおいて生じていることは、ボールの特性から考えると、「自他の分離」だけではないと考えられた。そこで本研究の第一章では、まずプレイセラピーにおいてもよく用いられる、ボールという遊具そのものについて検討を行った。ボールの歴史的な背景の検討から、ボールが太古から人間の生活や文化の中に存在し、それらに密接にかかわってきた遊具であったことや、それを用いてゲームに参入する人をそこに没入させ、またその人に「自分や仲間の新しい人間性に気づく楽しみ」や「人間的自覚」をもたらし得る遊具であることが示された。さらに、プレイセラピーにおいてボールは、従来は治療関係の構築のための道具としての役割や、言葉等の代わりとしての役割を持っていると考えられており、「キャッチボールモデル」において想定されていたような、「自他の分離」にかかわる機能については言及されていないことが示された。

そこでさらに第一章では、実際のボールのやり取りの次元からの検討を通して、「キャッチボールモデル」が拡充された。その結果、ボールが「自他の一体感」や「自他の予測を超えるもの」をもたらし得ることが示された。このようにして、自閉的なクライアントの心理

療法における自他の分離について、ボールのやり取りから検討するための着眼点が提示された。

第二章以降では、第一章で得られた、ボールの機能の観点から、自閉的なクライアントの心理療法のプロセスが検討された。

第二章では、その経過の中で自閉症と診断された、3歳男児のプレイセラピーの事例が検討された。来談当初はセラピストと視線も合わず、コミュニケーションも乏しかったが、プレイ中に大小便を盛んにしてセラピストに世話をされるなどする中で、徐々に他者としてのセラピストが意識されるようになり、セラピストに様々な要求をするようになっていった。事例の経過において、クライアントはセラピストとの分離以前の一体感の中にいたと思われたが、セラピストにアンパンマンのキャラクターを描かせ続ける中で、双方のディスコミュニケーションが顕在化し、最終的にクライアントの「バカモノ」という言葉として、自他の分離が生じたと考えられた。この事例においては、クライアントはボールを用いることはあったが、それをセラピストとの間でやり取りすることはほとんどなかった。その一方、クライアント自身が高いところからセラピストに向かって飛び込んだり、セラピストがクライアントをボールプールの中に投げ込んだりすることが多く行われたが、これらのプレイにおいて、むしろクライアント自身が1つのボールであったと考察された。このようなやり取りが、クライアントとセラピストが分離して対峙する以前の、ボールのやり取りの一つの形であったと考えられた。

第三章においては、その経過の途中から盛んにセラピストとボールを蹴り合うようになった、児童養護施設における、全般的な発達の遅れが見られた男児のプレイセラピーの事例が検討された。この男児は来談当初は全般的な発達の遅れが見られ、また自他の区別があいまいなところがあったが、様々な遊びを経て、急にボールを持ちだして、セラピストと蹴り合うようになった。この事例におけるボールの蹴り合いが生じるまでのプロセスを検討したところ、混沌を作り出して、そこから個として分離する遊びや、分離を前提としたババ抜きなどのカードゲームと、両者の境界をあいまいにするような、まわり将棋などの円環的な遊びが行われており、これらの遊びにおける分離と一体感が、その後のボールの蹴り合いをもたらしたことが明らかになった。そして、ボールの蹴り合いが、確かにクライアントとセラピストの分離と対峙を前提にしており、また蹴り合いそれ自体が、両者の対時的な関係を促進すると考えられた。さらに、蹴り合いによってクライアントの「心の主体」がより鮮明になるとき、垂直方向への意識や表現が生じることが示唆され、またその軸としての中心が

できたことを示す表現が現れることが、事例を通して示された。これらの検討から、プレイセラピーにおけるキャッチボールやボールの蹴り合いは、自他未分化な状態にあるクライアントが、他者とは隔てられ、分離した個を確立し、またその個として改めて他者との関係を構築していくプロセスに密接に関わる、重要な表現であると考えられた。

第四章では、第二章および第三章で取り上げた事例を総合して、プレイセラピーにおけるボールのやり取りが、どのようにして自他の分離に関わる体験をもたらすのかが検討された。その結果、ボールのやり取りにおいて、自他の分離と一体感は同時的に生じること、そしてボールのやり取りにおける他者との一体感は、飽くまで両者の間を動くボールへの専心を通してなされること、さらにそこではイメージのレベルでの他者との一体感が生じ得ることが考えられた。また第四章では、第二章と第三章で取り上げた事例とは別の、さまざまなボール遊びを展開させた子どものプレイセラピーの事例において、経過の中で突如として子どもがバレーボールを行った際の、ボールのやり取りにおけるセラピストの主観的な体験が詳細に検討された。この検討を通して、ボールのやり取りには本質的にそのボールをやり取りする両者の予測を超えるものが含まれることが示され、このような体験が自閉的なクライアントの心理療法において、治療的に働くのではないかと、ということが考察された。以上のことから、ボールのやり取りにおけるセラピストの姿勢として、「ボールを介して他者と対峙する」というスタンスが重要であるが、さらに、「自分の予測を超えるものに対して、能動的に身を投げ出す」とでも言うべき姿勢が、クライアントの主体性を賦活する可能性を持つという点において重要なのではないかと考察された。

続く第五章と第六章では、プレイセラピーとは異なり、実際のボールが用いられることがない心理療法面接の事例が取り上げられ、これらの面接における言葉等のボールのやり取りが検討された。まず第五章では、自閉症スペクトラム障害が疑われた青年の事例を取り上げて、このクライアントの「自分のなさ」の自覚に着目して検討が行われた。この事例において、面接は早期に一度中断した。しかしその後、現実生活においてトラブルを起こし、半ば義務的に再度来談することになった。その後の面接において、セラピストの側が積極性を示し、クライアントはそれに応えて主訴を語るようになり、継続面接が行われることになった。しかし、その後の面接では「面接で何を話したらいいのか」ということが意識されるようになり、面接における気まずさが生じてきた。そして、「話すことがないのであれば面接をやめたい」ことをめぐってのセラピストとのやり取りの中で、クライアントに「自分のなさ」が自覚されるに至ったが、その一方で卒業論文を書き上げ、大学を卒業することができ、

終結に至った。このような経過から、この事例においても、自他の分離は、他者としてのセラピストとの対峙の中で生じてきたものと考察された。「自分のなさの自覚」という形で生じた自他の分離により、クライアントはセラピストと分離した他者として対峙し、ボールを投げ合うようにして、言葉のやり取りを行うようになったと考察された。これらのことから、言葉をボールとして捉え、それをやり取りすることが「自他の分離」を促進するものという、従来の「キャッチボールモデル」を支持する観点が示された。また、この事例において、セラピストの主体的な動きにより、クライアントが「心理療法におけるクライアント」として振る舞っていられなくなったときに、「自分のなさ」が自覚され、それを自覚する主体が現れてきた。この点から、彼らの心理療法では、セラピスト自身が心理療法に対する先入観を乗り越えていく必要があることが示された。

第六章では、自閉スペクトラム症と診断され、緘黙とカタトニア様の身体のぎこちなさを呈した高校生の事例が取り上げられた。このクライアントは、来談当初はセラピストの言葉は理解しているようであるものの、視線は合わず、自発的な行動や発話はほとんどなかった。しかしセラピストがクライアントをプレイルームに導入しようとした際に明瞭に拒否を示したことで、セラピストは腰が据わり、その後は面接室でお互い向き合って座り、大部分は沈黙しているが、時折セラピストがその場で思いつくことを言葉にする、という面接が続いた。その結果、クライアントは次第にセラピストの言動に反応をするようになり、さらには爆笑や放屁という形でセラピストとコミュニケーションを取るようになっていった。しかし同時に面接への抵抗が増し、中断に至った。まず本事例のクライアントが示した緘黙や身体のぎこちなさは、自身を客観的に見る視点が生まれ、また周囲から適応を求められる中で、そこから懸命に退却しようとしていた結果の姿として、理解できると考察された。そして、この事例において、クライアントに対してコミュニケーションを引き出そうとせず、思いついたことを思いつくままに喋るセラピストの言葉は、まさに言葉のボールであったと考えられた。また、クライアントが面接の場に持ち込んだ物（枯れた草の根）や爆笑や放屁は、セラピストが投げってくるボール（言葉）に反応するボールであるという視点が示された。

第七章では、第五章の事例と第六章の事例を総合して、自閉的なクライアントの、言葉を用いた面接や、プレイセラピーのようにボールを用いることのない心理療法面接において、プレイセラピーの事例から得られた、ボールが果たし得る機能が、どのように現れ、または働き得るのが検討された。その結果、ボールのやり取りにおいて自他の分離は自他の一体感と同時的に生じるという観点から、クライアントとセラピストとの一体感を伴ってリズ

ミカルに進んでいく言葉のやり取りは、自他の分離をもたらす可能性を内包していること、自閉的なクライアントに対して、セラピストが言葉のレベルでクライアントの表現をキャッチして投げ返そうという姿勢は、かえって彼らを自他未分の混乱した世界に誘導してしまう可能性があることが考察された。さらに、第六章におけるセラピストの体験が改めて詳細に検討され、セラピストは、相手に全く関係なく、つまり何らの特別の配慮なく、「言葉のボール」を「ただ投げる」というあり方で面接に臨んでおり、このときにセラピストにより投げられる「言葉のボール」とクライアントの反応は、クライアントのみならず、セラピストの予測も超えるものとして両者の間を行き交っていたと考えられた。

終章では、第七章までで明らかになったことを踏まえて、自閉的なクライアントのプレイセラピーと心理療法における自他の分離について、ボールのやり取りの観点から総合的に考察された。まず自閉的なクライアントの心理療法に、ボールのやり取りという観点を持ち込むことの意義として、ボールのやり取りにおける自他の分離と自他の一体感の同時性の観点から考察された。またここではさらに、そのボールや言葉のやり取りが、アクチュアリティの次元を開くような「言葉のボール」のやり取りになっていくことが心理療法として重要であり、そのためにはセラピストの側に、自身の言葉やクライアントの表現を、リアリティを伴った「ボール」として捉え、受け取ろうとする姿勢が重要であることが考察された。

終章ではさらに、関係学派の精神分析家である Benjamin の *thirdness* に関する議論をもとに、「第三のもの」としてのボールについても考察された。Benjamin は *third* についての考察において、「*third in the one*」と「*one in the third*」という概念を提出している。これらはそれぞれ、「治療者と患者の双方が変化していく基盤となるような、一体感の中に許容される両者の差異」、「早期の母子のやり取りにおいて生じるリズムの共有の根底にある感情的な共鳴または結合の原理」として捉えられる。終章では、これらの概念を踏まえてバレーボールの対人レシーブにおけるボールのやり取りの体験を検討し、ボールのやり取りは、「*third in the one*」と「*one in the third*」の両者を本質的に内包した営みであると考察された。さらに、このようなボールのやり取りが、そこで第三のものが動くやり取りになり、そこに自他の分離が生じていくために必要な治療者の姿勢として、ただ受け身のスタンスで「身を任せる」のではなく、「能動的に身を投げ出す」姿勢が重要であると結論された。